

湖水の渴き

野口津義夫

平成元年における一秘話

横浜市内の賑やかな雑踏から逃れた、ほとんど人の通らない迷路のような小路をいくつか辿った所にある、閑静な屋敷の奥まった地下室に、何気ない風を装った美しい女性達が、一人また一人と、この日も集まって来た。(本文抜粋)

湖水の渴き

はじめに

この物語は、簡単に言えば、恋人願望の強いダンディーな独身中年男が素敵な女性を追い求め、いくつかの恋の遍歴を経て、遂に理想の女性に巡り合うというラブストーリーである。だが、たかがこの程度の素材で、哲学的ロマン小説家としての私が、果たして純文学作品を書くだろうか。

読者のために、この物語の結末がハッピーエンドになるか否かは言わないが、私にとつては、それが悲劇であろうとなかろうと、どちらでも同じことである。というのは、私は、人生や世界に対して一定のスタンスを持っており、私の人生観や世界観でもってしか千変万化する日常の諸事象を観ることができないからである。故に、私は世の様々な事象の表面的な種別に、安易に惑わされたり左右されたりすることはない。

第一、悲劇と喜劇は紙一重だし、その意味では、確かにハッピーエンドとなる物語であつても、次に待ち受けているのはアンハッピーニングかもしれないからである。

また、小説の評価はストーリーの展開だけに尽きるものではない。単にストーリーがおもしろいというだけなら、わざわざ純文学作品を書く必要がない。別に推理小説や探偵小説でもいいからである。私の目指すところのものは、質の高い芸術作品である。そこにおいては、文学性は勿論のこと、哲学性、そして芸術性が一体となっていないといけない。

したがって、単なる男女の恋愛を扱う物語においても、その背後にある本質や作者の意図を汲み取ってもらいたいというのが、私の切なる願いである。

さて、この物語は平成元年に起こった奇怪な出来事を扱っているのだが、恋愛物語という形式的ジャンルを超えたサスペンス風の心理小説とも取れるので、先入観を廃した読者の見識に評価を委ねたい所存である。

ただ、私としては、差し当たって、この哲学的ロマン小説に長編純文学的ラブストーリーという看板を掲げたい。

序

それは、どこかの城跡に造ったような、駅周辺の喧騒を逃れた広い静かな公園であった。メイ
ンストリートから分岐した横道に続く緩やかな傾斜の坂道を、見様によっては洒落た中年男が、
夏の暑さに閉口した人達が恋焦がれた薄手のセーターを着て、秋めく風景の中を胸のときめきを
抑えながら、ゆっくりと上って行った。

やがて男は坂道を上り切って、広々とした空間を見渡しながら、恋の打ち明け場所である中央
の歌壇へと足を運んだ。

正直なところ、彼は、まさかこうなるとは思ってもみなかった。さして取り柄のない四十二歳
の男が、夢物語じゃあるまいし、十八も年下の女に愛を告白するなんて――。そうだ、これは、き
つと夢物語なんだと、彼は自分に言い聞かせた。それは文字どおり夢のように儂い結末になるこ
とは間違いないのだと、彼は自分に言い含めた。そうでもしないと、いざという段になって自分
の心中の思いが微妙に揺れ動き、当初の決断どおりに全うできなくなる恐れがあったからだ。

「断られて元々さ」

と独り言を言って、彼は内に秘めた熱情を抑えながら、やがて現れるであろう美しい女を静か
に待った。

彼は立ったまま、さつき自分が通って来た、公園の入口に達する石段の辺りをじっと見ていた。
一体どうしたことだろう？ そういえば、さつきから自分の他に誰一人いない。ただ最早暑くない

明るい透明な日差しと、実質性を欠いた幾何学的な空間と、清流のエッセンスだけを抽出してきたような大気だけが、人間の理解を超えた法則で公園という被験体の中で作用しているような感じがした。

約束の時間になっても女は来そうになかったので、彼はベンチに座ってタバコを吸いながら心を落ち着かせた。

暫くして、いつの間にか女が現れた。

「待った？」

彼女の美しさと妖精のような問い掛けが、男の目に幻影のように映った。

「いや、そんなに——」

男はベンチに彼女を誘い、予定どおりに愛を打ち明けた。

「せっかちだが、そのためにあなたを呼んだのだから、一気に言ってしまうよ」

女は頷いた。彼は、彼女の無感触な手を握って簡潔に告白した。

「実は、私と結婚してほしいんだ。今までお互いに、そのつもりで付き合ってきたと解釈している。どうか？」

彼女は間髪を入れず微笑んで応じた。

「嬉しいわ。是非……」

彼女の紅い唇の動きだけが彼の記憶に残った。

『何だかおかしい！』

「何がおかしいって言うの？」

彼は驚いた。

「お前は誰だ？」

「何言ってるの。あなたの恋人よ」

「違う！」

女は笑った。彼女の小悪魔的な笑みが男を虜にした。

「一体何が違うって言うの？」

「第一おかしいじゃないか。あなたのような若い美しい魅力的な女性が、私のような四十過ぎの男の申し出に、一つ返事で承諾するなんて！」

「一つ返事？そんな言葉ってあるの？」

彼女はケチをつけた。

「黙れ！」

女は、びっくりして手を振りほどいた。

「これは失礼。しかし、真面目に答えてくれないか。なぜなのか、どうも私には分からないんだ」
女は呆れた。

「不釣り合いだって言うの？だって、私は二人の男に騙された過去を持っている女よ。そして、そんな私でも構わないって、あなたが言ってくれたじゃないの」

「それはそうだが。しかし、それでも何かおかしい気がする……」

「均衡は保たれてるわ」

「待ってくれ！均衡で結婚するのか？」

「それだけじゃないけど、必要だわ」

「よし！それなら均衡を破ってやる。実は、俺は大金持ちなんかじゃないんだ。預金さえ一文無しの、ただの労働者さ！」

「何ですって！」

女は狼狽して叫んだ。

「そうか。それで分かった。お前は最初から財産目当てだったんだな。そんな女は、こっちから御免だね」

「畜生！よくも騙したわね」

女は悔しさのため激昂した。男は、無一文の男に騙されずに済んだのだから破談になって幸いなのに、なぜ女が、こんなにも狂乱するのか不思議だった。

しかし、もっと悲しい状態で更に均衡が破れた。泣くだけ泣いて落ち着きを取り戻した後、女は次のように言ったのである。

「私は二人の男に騙されてなんかいないわ。そういうふうにして、あなたに同情させて近づいたのよ。結婚を前提にして、あなたに捧げた私の操を、どうしてくれるの！」

これを聞いて、男は激しい良心の呵責に喘いだ。

「私の操を、どうしてくれるの。操を、どうしてくれるの。どうしてくれるの。どうして、くれ

るのおおおお…」

細田は、はっとして夢から覚めた。気がついてみると、全身が汗でびっしりだった。彼は自分の悪行が夢であつてほつとしたが、この前代未聞のエキサイティングな夢に、戦慄と同時に言いがたい快感を覚えた。

細田俊彦は、この夢の中に出て来た主人公と同様、見様によつては洒落た中年男であつたが、文無しの悪漢ではなかつた。彼には、戦後、段ボール会社を設立して偉業を成し遂げた祖父と、その事業を引き継いで、今では紙コップやカレンダー、そしてプラスチック容器や商業包装紙などの生産販売を手広く行つてきた父とがいた。

しかし、その祖父も十五年前に亡くなり、父も今では引退して老後を調布の自宅でのんびりと送っている。父は最初、長男の俊彦に期待を寄せていたが、彼が自分の会社を継ぐ意思が全くないと分かつて、やむを得ず次男の義彦に全てを委ねていた。

俊彦は大学を卒業した後、一旦父の会社に入社したものの数年で早々と辞め、一年間ぶらぶらした後、再び母校の研究科に入学した。そして修士号を取得した後、専門学校で法律を教えたりして、独り気ままにマンションライフを送っていた。

「俺は実業家には向かないんだ」

と、彼が父や弟の前で言うのが常だった。

だが、彼は金儲けが全く下手だというわけではなかつた。暇を生かして取り組んだ株の売買が

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。